

## 風と遊び 風に学ぶ 24-25

### 風と遊び 風に学ぶ 24

#### 旧丸ビルの松杭でベンチと積み木を創る

辰濃 和男

「旧丸ビルを支えていた北米産の松の杭が、ビル解体後、ベンチになる」。去年の春、そんな記事が朝日新聞にのった。



東京駅前の丸ビルは、子どものころから見慣れた風景だ。が、この記事を読んでからは、五千四百四十三本の松杭が闇のなかにすくと立ち、巨大な建造物を支えている、という見たこともない風景をしばしば思い浮かべることになった。

松はアメリカのオレゴン産で一本の長さが十五メートルもあるという。



オレゴンパインは約八十年、異国のビルを支え、異国の経済成長を支えてきたのだ。樹木の生命力、ねばり強さ、けなげさ、を思った。



丸の内へ行き、新大手町ビルのそばに三脚、新日鉄ビルと日本ビルの間に六脚あるベンチを見た。木のベンチは、灰色のビル街に温かみを添えていた。昼どきで、ビル街の人たちが座り、憩いをとったり、雑誌を読んだりしていた。もはや闇のなかではなく、松の杭はまぶしいほどの光のなかにあった。



山梨県の田富町で家具工房木楽舎を営む荻野雅之さん（53歳）を訪ねた。

荻野さんが旧丸ビル所有者の三菱地所と話し合い、三十本の松杭を譲り受けたのは二年前だ。ベンチをつくるのは、三菱地所の意思だった。

「米松を切って驚きましたね。断面の美しさが衰えていないんです。まだ脂（やに）を含んでいて水をはじくんですよ。木ってすごいですね」



荻野さんは、ベンチだけではなく、たくさんの積み木をつくった。

いや、実をいうと、積み木のほうが先だった。



話が少しさかのぼるが、何年か前、長男が父親にこんな注文をしたことがある。「家具だけじゃなく、小さな子が素直に、強烈に喜べるものをつくってみようよ」

荻野さんはやがて、国産の檜で積み木をつくりはじめる。



一辺三センチの立方体、小さな板、台形のもの、その三種類だけをつくる。

八ヶ岳山麓の清里で毎年開かれるポール・ラッシュ祭に、檜の積み木を出品したのは四年前だ。

小学五年の少年が現れ、何千個もの積み木で城やトラクターを自在につくりはじめた。あまりの見事さに、荻野さんは少年を「プロフェッサー」と呼んだ。翌年も、翌々年も、少年は現れた。創（つく）る。壊す。積み上げる。その楽しさに多くの子が加わりだした。

●  
「木を通して手ともに伝えたいことがたくさんあります」

その手触り、その香りをまず知ってもらいたいし、さらにいえば「積み木が森を救う」ことも知ってもらいたかった。

●  
「いま人工林の山が荒れています。伐(き)るべき時期に伐らないと、檜や杉が密生状態になり、光が差し込まないから下草もはえず、土砂が流れやすくなっています」

「森の恵みを思い、山を守るのは私たちの責任です。積み木をひろめ、木で遊ぶ子がふえればいいと思うし、何よりも、積み木を通して手ともに木のよさを右脳で知ってもらいたいんです」

●  
そういう思いが背景にあったからだろう。旧丸ビルを支えた松杭の話を知ったとき、すぐ、これで積み木を、と思った。杭だった松はいま、積み木になって各地の幼稚園などで使われている。

●  
家具職人としての荻野さんがふと、いった。「テーブルというのはそこで何十年も会話のキャッチボールがなされる舞台なんだから、それを使うことで心がゆたかになるものをつくりたい。椅子(いす)でも、それに座れば、気持ちがなえたときでも元気になるというのをつくりたいですね」

積み木が子どもたちの心をゆたかにする、ということもあるはずだ。

次回は、そのことを報告したい。

(日本エッセイスト・クラブ専務理事)

積み木で《夢》を創る

辰濃 和男

前月号で、木楽舎の荻野雅之さんのことを書いた。今回は積み木のことを書く。

取材したのは、東京の葛飾区奥戸にある「あすなる幼稚園」だ。

日の光をたっぷり浴びた板張りのホールに、子どもたちのにぎやかな声があふれている。一つ一つはごく小さな積み木なのだが、それが、これほどまでに大きな歓(よろこ)びを生むものだということにまず、驚いた。

自分の好きなことを思いっきりやっていることが解放感につながるのだろう。生きのいい声が絶えない。

「積み木はふしぎですね。なにかを創っているうちに想像力がふくらんで、どんどん発想が変わってゆくんです」

園長の橋本俊子(しゅんこ)さんの声が聞き取れないほどだ。

積み木は指先を使うし、積み上げるには集中力がある。テレビゲームも同じだが、違うのは、ここには極めてゆっくりとした時が流れていることだろう。一つ積んでは考え、考えてはまた一つ積む。積んでから崩れないかを見守る。創るのは、ほかのだれのもない、自分の《夢》だ。

木楽舎の積み木の材は、前回も書いたが、北米産の松(旧丸ビルを地下で支えていた松の杭)と、国産の檜で、「あすなる幼稚園」では、両方をまぜている。松と檜との対比がおもしろい模様を描いている。古い松杭の松は茶色っぽくて、木目がめだつ。檜は白っぽくて、香りを放っている。

「去年、千ピースを買おうと思って、木楽舎のある山梨まで行ったんです。実際、自分で積み木をやってみて夢中になってしまって、思い切って三千ピース買いました」

一メートルの高さの檜(やぐら)を創った子が「見て見て」としきりに先生の袖(そで)を引っ張っている。アーチを上手に創

った子が満面の笑みで自分をほめている。縦に積まず横に並べて道路を創る子もいる。木目をそろえて並べ、斬新なデザインを創りだしている子もいる。高いビルを創って「超高級ホテルだよ。一泊五万六千円だ」と自慢する子もいる。

ひろげた両手に積み木を一つずつ持って走り、「飛行機だ」と叫んでいる子もいるんですよ、と橋本さんがいった。

積み上げる子、積み木を集めてくる子、口を出す子、役割の分担もある。いつのまにか、あまり話をしたことのない子と一緒に何かを創っていることもあるし、無口で引っ込み思案の子がみなに作品をほめられて声を出すようになる。これも

積み木効果の一つなのだろう。

積み上げてゆくうちに崩れることがある。最初は泣く子もいたが、今は、崩れてもめげない。積む。崩れる。また積む。それが醍醐味になる。失敗しても失敗しても、しんぼう強く繰り返せばいつか《夢》がかなう、ということも学んでゆく。

違う組の子、年長組と年少組の子が、一緒になって遊んでいる。

「そうなんです。ほかのクラスからも積み木をやりたい、という子がここに来ているんです」

木楽舎の積み木は①一辺3センチの立方体②長さ12センチの板③底辺3センチ台形のもの、の三種類だ。三種類の小さな、単純な形の積み木が限りなく多様な《夢》を育てる。

「一つ一つの積み木は子どもの手で扱いやすい大きさだし、崩れたり、落としたりしても痛くないし、それに、手触りのやわらかさ、あったかみ、白木のままのよさ、一つ一つ違う木目、檜の香り……」

園長さんは積み木のよさを数え上げた。木ってすてきですね、ともいった。

「私も小さいときから木が好きでよく木登りをしました。いまも子どもたちは木登りが好きですよ」  
(日本エッセイスト・クラブ専務理事)

(朝日新聞社 暮らしの風 2002年3月、4月号掲載)